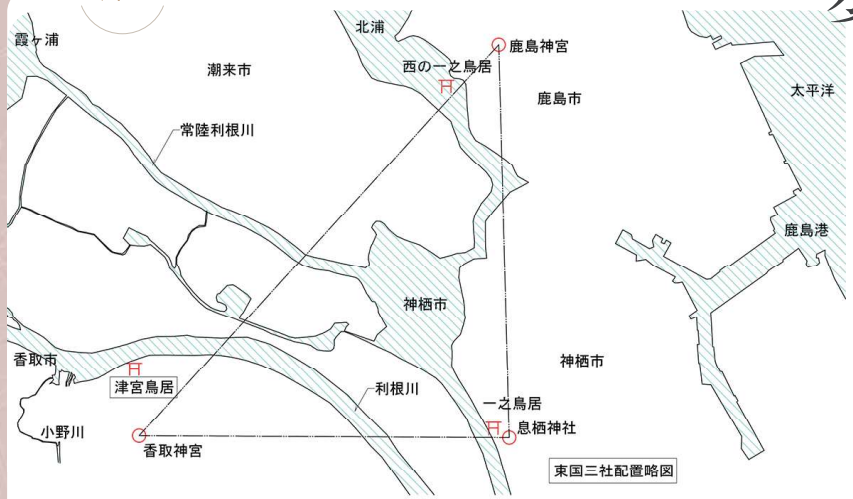
まち紹介 第7回

銚子

東国三社と猿田神社と銚子を歩く 第2回

文・写真
橋本 修一



東国三社配置略図

1.香取神宮を歩く

前号に続いて要石から歩いてみましょう。

香取神宮の要石について

要石と言っても地上に出ている部分は、直径20cmにも満たないくらいの石ですが、掘っても掘っても底に行き当たらないと云われています。地震を呼ぶ大鯰を押さえるために鹿島香取の大神が地中深く石棒を差し込んだと云われています。香取は凸、鹿島は凹の形をしています。鹿島神宮の要石は、後で紹介します。

▲旧参道(桜並木)

奥宮について

旧参道(丁度桜が満開でした。)沿いには、要石と並んで見落としてはならないパワースポットが、香取神宮の奥宮です。御祭神の荒魂は、勇武果敢に円満調和なる、和魂(にぎみたま)のささえとなっていて、また邪気を祓い開運厄払い等のご加護を得られるとの事です。なお奥宮の木材は、昭和48年の伊勢神宮遷宮の際の古材を使用して建立されたと云うことです。深閑とした木々の立ち並ぶ中に、たたずむ奥宮に霊的な感覚を覚えました。

2.息栖神社を歩く

御祭神は久那斗神です。また相殿には天鳥船神住吉三神が鎮座しています。久那斗神は、またの名を『岐神』と言い路の神であり、厄除招福そして井戸の神でもあります。創祀は、応神天皇の御代と伝えられているものの神代に鹿島・香取両御祭神に従って東国に至り、海辺の港に姿を留めてやがて応神朝に神社として祀られたとの事です。常陸風土記には、香島神郡が出来たのは大化五年(約1300年前)とあり、和尚年間に鹿島丘陵の南は、ようやく陸続きとなっていくつかの集落が出来さらに南に延びました。そのような時にこの仲州に鎮座され、大同二年(807年)に平城天皇の勅命によって、藤原内麻呂が現在の地に遷されたと伝えられています。一の鳥居の両側には、小さな鳥居が並んでいます。ここから清水が湧き出ていて日本三所の霊水と言われています。昔は海の一部であったにも係わらず真水が、湧き出たので忍潮井(おしおい)と名付けられました。本殿及び拝殿はRC造平家建てで、昭和38年5月に建て替えられました。

3. 鹿島神宮を歩く

御祭神は、武甕槌（たけみかづち）大神です。何故鹿島の地に鎮座なされたかは、古事記の国譲りを調べてください。最初に大鳥居ですが、東日本大震災で、倒壊した（その時は、石造）のですが、平成26年に木造の大鳥居に復元しました。この荘厳さに圧倒されます。

さらにすぐ楼門が表れます。日本三大楼門の一つに数えられる楼門は、高さ約13m、重要文化財に指定されています。寛永11年（1634）、水戸徳川初代藩主の頼房卿により奉納されました。浅草の水戸藩下屋敷で130余人の大工が切組み、船筏で運んで組み立てたそうです。昭和15年の大修理の際丹塗りとし、昭和40年代に檜皮葺の屋根を銅板葺にしました。楼門を過ぎまして、参道を行くとすぐ左手に拝殿と本殿が、表れます。本殿・石の間・幣殿・拝殿の4棟からなる社殿は、元和5年（1619）、徳川2代将軍の秀忠公が寄進したもので、重要文化財に指定されています。奥宮に向かって300m程伸びる奥参道は鬱蒼とした巨木に覆われ、荘厳な雰囲気を醸し出しています。そのまましばらく歩くと奥宮が、見えてきます。現在の社殿は、慶長10年（1605）に徳川家康が関ヶ原戦勝の御礼に現在の本殿の位置に本宮として奉納したものを、その14年後に新たな社殿を建てるにあたりこの位置に遷してきたものです。現在門を改修しています。ここから右に行くと要石、左に行くと御手洗の池に行く事になるのですが、要石を参拝しましょう。写真でも解るかと思いますが、明らかに、凹の形をしています。ぜひ、実際に行かれて、確認してみてください。このことから香取の要石と対をなしていると言われています。考えて見ると諏訪の地を基点とした中央構造線が、西は熊本の地へ、東は鹿島香取の地に向かっていることも、何かのつながりを感じます。水戸の徳川光圀公がどこまで深く埋まっているか確かめようと7日7晩にわたって掘らせたものの辿り着くことができなかったので諦めたと言われています。

◀拝殿

◀奥参道

◀本宮

◀要石

4. 猿田神社を歩く

猿田神社の御祭神は、猿田彦大神です。さらに相殿左に天鈿女（あめのうずめ）命、右には、菊理媛（くくりひめ）命が鎮座しています。このことから安産と商売繁盛の神とされています。第十一代垂仁天皇25年に建立されたと言われています。本殿は、807年改築された記録があり、その後何度かの修築改築をへて、1566年の戦火で焼失してしまいましたが、1574年に再建、1680年に改築をされて、現在に至っています。その様式は、桃

山時代の豪華佳麗さを伝える貴重な建築物として県有形文化財に指定されています。猿田神社で気づくことは、鳥居をくぐって参道が、すぐに石段になっていることです。なぜこのようになっているかと言えば、参道をJR総武本線が、横切っているのです。車で来ると裏側から入っていく事になるので、なかなか気づかないと思いますが、一度こちらから入ってみてください。深い森に入っていくようで、ジブリの世界そのものです。

5. 銚子・犬吠埼を歩く

猿田神社からの帰り道を少し寄り道をして、犬吠埼まで来てみました。よく初日の出を拝みに来ますが、下まで降りたのは、小学校の遠足以来でしょうか。このがけの地層は、白亜紀（約1億2000年）の地層で、もしかしたら恐竜時代の痕跡が見つかるかもしれませんと案内板に書いてあります。犬吠埼周辺の砂岩は、通称銚子石と呼ばれ、建材や砥石にも利用され、利根川を登って江戸まで運ばれたそうです。佐原でも古い家を改修すると、よく基礎石として銚子石が出てきます。さて波打ち際の写真を取って見ました。どこかで見たように感じましたか。そうです。東映映画のオープニングの映像です。荒磯に波と題されているそうですが、現在崖崩れ等で、撮影場所は立ち入り禁止になっています。近くの似た風景を撮ってみました。

6. 最後に

是非ともご紹介したい祭事に神幸祭があります。この祭事は約800年の昔から伝わる祭事で、香取神宮の祭神経津主大神が東国を平定した時の様子を模していると言われています。氏子が平安時代さながらの装束を身にまとい行列を組んで神宮の周りを歩きます。また12年に一度午年には、式年神幸祭が行われ、甲冑武者の装いや盾や矛を持つ人、神輿を担ぐ人など氏子約3,000人の大行列が連なり、また約120艘の大船団と共に巡幸して香取神宮の御祭神である経津主大神と鹿島神宮の御祭神である武甕槌大神が水上で出会うというそれは壮麗なものです。次回の式年神幸祭は、令和8（2026）年になります。なにしろ12年に一度になりますので、是非とも見てみたいと思います。今回は、東国三社と猿田神社を歩いてみましたが、各神宮や神社の謂れに付いては、各社務所で出している栞や冊子を参照しました。ただし、日本の歴史の創世記の事ですので、いろいろ見解があるかと思います。もっと詳しく知りたいという場合は、古事記や日本書紀史等を調べてみてください。

◀香取神宮津宮の鳥居

◀鹿島神宮西一之鳥居